

平成 29 年度 第 8 回 観察会 記録

日 時	平成 29 年 10 月 17 日 (金) ~ 10 月 18 日 (土)
観察地	京都府北部の与謝野町・阿蘇海
講 師	NPO 法人丹後の自然を守る会代長 蒲田 充弘先生
テー マ	阿蘇海のシロサケと丹後の歴史と文化
備 考	参加者 田中克先生・講座生 24 名、スタッフ渡邊啓子、山野涉 計 27 名 記録 山野 涉

はじめに

蒲田充弘先生に平成 28 年 7 月に大阪で「丹後の海を守り地域を創生する」の演題で講演をしていたき、今回その現場を見せていただいた。丹後地域の自然、歴史、文化を守り、地域の活性化に取り組む蒲田先生や地域の人々とのふれあいに、熱いものを感じた観察会であった。

なお、ご参考に「自然と仲間」12 月号に投稿された船本浩路さんのレポートを付加した。

一日目 (10 月 17 日)

蒲田先生との再会

8:30 大和ハウス前から大和観光のバスで目的地・京都府謝野町に向けて出発。舞鶴若狭自動車道の西紀 SA で小休止後 11:15 ごろ与謝野町のリフレ「かやの里」に到着。蒲田先生の出迎えを受け挨拶交換 (右写真)。

かやの里の食堂「森のレストラン」で昼食。伊那の里の地元産の野菜と魚の手作り弁当で、とてもおいしくいただいた。



ひまわりフェスティバル

昼食後、蒲田先生が観察会の概要を説明され野田川に向かった。途中、枯れてはいたがかなり広いヒマワリ畑があったので尋ねると、平成 10 年から休耕田を利用し、今年は 5 ヘクタールに 20 万本を植え「与謝野町ひまわりフェスティバル」を 8 月 4 日から 11 日まで実施したとのこと。巨大ひまわり迷路やフォトコンテストなども開催され、いまや与謝野町の夏の風物詩として多くの観光客でにぎわうとのことであった。一見の価値ありと思われたので紹介する。(右写真は最盛期のひまわり・与謝野町 HP から)



シロサケ いのちの循環

野田川に到着。川幅は狭く、水深も浅い野田川であるが川面を見ると、遡上してくるシロサケ、ペアーのシロサケ、産卵直前のシロサケ、全身に傷を負い産卵後のち尽きた個体など多くを観察した。

野田川で繰り広げられるいのちの循環、生命をつなぐ行為を眼のあたりにし、その神秘さに触れて大きな感動を覚えた。

同時に、与謝野町で廃油の回収からはじめ、野田川の清掃などをとおして阿蘇海再生に町ぐるみで取り組み、ようやく戻ってきたシロサケの保護活動に尽力されている蒲田先生はじめ、丹後の自然を守る会および町の人々に、改めて尊敬の念を覚えたことであった。



シロサケのペア



シロサケを観る

後野区公民館にて

1. 区長さんからシロサケの保護活動について説明していただいた。(内容は船本報告参照)
2. 与謝野町に伝わることも歌舞伎をビデオで鑑賞した。与謝野町で開かれる加悦谷祭り(4月29日～30日)で奉納される「後野区宮本町愛宕山子供歌舞伎」である。この子供歌舞伎は平成2年、芸屋台が修復されたのをきっかけに地元で組織された「宮本町愛宕山子供歌舞伎保存会」が加悦谷祭りに合わせて上演。子供たちは3月上旬から日曜日や平日の夜などに練習を重ね、「義経千本桜」の「吉野山道行の場」を演じる場面は子供ながら迫力のある演技で、観客を沸かせていたのが印象的であった。



区長さんから野田川のシロサケのレクチャー



子ども歌舞伎の一コマ（ビデオ映像から）

丹後ちりめん着物試着

丹後ちりめんの和服の試着させていただいた。着付け係の岸田さんに指導して頂き、その着心地を楽しんだ(右写真)。丹後ちりめん織元の丸仙(株)の安田博美取締役からちりめんのタオルなど、ミカン園のオーナーの岸田八重子さんから、丹後鉄道車内販売に限定して栽培しているミカンを特別に販売していただき、安田さんからは全員に「絹のまりも」を頂いた。

**二日目(10月18日)**丹後ちりめん

「ちりめん博物館」にて丹後ちりめんの歴史や特徴を説明していただき、製法を見学した。丹後ちりめんは、京都府丹後地方で生産される高級絹織物の総称で、主な産地は京丹後市、宮津市、与謝郡与謝野町。日本国内の約1/3の絹を消費する日本最大の絹織物産地とのこと。白生地のまま京都市・室町の問屋に出荷されることが多く、丹後外で染色や縫製がなされて製品となるそうだ。丹後ちりめんは経糸(たていと)に撚りのない生糸、緯糸(よこいと)に1メートルあたり3,000回前後の強い撚りをかけた生糸を交互に織り込み生地にし、その後、精練することによって糸が収縮し、緯糸の撚りがもどり、生地全面に細かい凸凹状の「シボ」がでた織物で、ちりめんの代表的存在である「丹後ちりめん」は、このシボが最大の特徴で、シボがあることでシワがよりにくく、しなやかな風合いに優れ、凸凹の乱反射によって染め上がりの色合いが豊かな、しかも深みのある色を醸し出すことができるとのことであった。蒲田先生は、丹後ちりめんの普及活動を京都府全域に行われていること。その成功を願いつつ、次の会場へ向かった。(右写真は織機)



バイオディーゼル燃料製造装置

「丹後の自然を守る会」の事務所で、会の皆様のふるさとに対する思いをお聞きした後、海・川の環境改善をしてきたバイオディーゼル燃料製造装置（下写真右）を見せていただいた。回収廃食用油は軽油代替燃料の原料として、地域でバイオディーゼル燃料に精製し、ディーゼル車に使用することで循環型社会を目指すとともに環境保全・地球温暖化防止活動へ貢献する目的で、蒲田先生が心血を注いで完成したこの装置は快調に稼働し、集めた廃食用油をこの装置を用いて純物を取り除き、バイオディーゼル燃料（脂肪酸メチルエステル）に精製され、軽油の代わりに使える燃料に生まれ変わる。与謝野町のみならず、丹後地方全域に広がった循環型社会の象徴ともいえるこの装置の一層の活躍祈った。



阿蘇海再生プロジェクトの看板



地域の人々との交友会



阿蘇海の牡蠣とブドウ栽培

阿蘇海を視察した。この海域は、天橋立て仕切られた宮津湾の内側（陸側）にある閉鎖性水域なので、ここに流れ込んだ生活排水により、海水の窒素やリンなどの含有量が高くなる富栄養化のため、牡蠣が大量繁殖している。そこで、地元住民や関西の大学生ボランティアにより、毎年夏と冬、それぞれ大量の蛎殻（約10トン）を取り除き、牡蠣殻は広さ約3haのぶどう畑に運びこまれ、ブドウ栽培に役立てるという。牡蠣殻をごみにしないでブドウの栽培に役立てる、ここにも循環の仕組みがつくられていた。

昼食後、日本三文殊の一つ智恩寺（臨済宗妙心寺派）にお参りしてよい知恵を授かるようにお願いした。元伊勢籠神社（もといせこのじんじゃ・天照大神が最初に巡幸した神社で、20数社ある元伊勢のなかでも随一の社格と由緒を持つという）を参拝、山上の笠松公園からシロサケの遡上経路を説明していただいた。区長さんにいただいた新米をお土産に、お世話になった蒲田先生にお別れし、帰阪の途についた。

参加者の皆さん



参考：船本浩路さんの「自然と仲間」12月号寄稿文

●サケの遡上観察

舞台は日本的に有名な天橋立で仕切られた阿蘇海に注ぐ野田川（流路約15km）である。幸い天気に恵まれ、地区の方々によって整備された河川敷をサケの保護活動の拠点となっている後野区公民館まで観察しながら歩いた。数は多くないものの、コイより一回りも二回りも大きな魚体が、一尾で或いはペアで泳いでいるのを発見。元気なペアと違って、産卵を終えた個体は、産卵床をつくる時に負った傷であろうか、からだ全体、特に尻尾がボロボロである。蒲田氏によると遡上したサケは一定の場所に留まるのは10日程度のこと。その間にパートナーを見つけ産卵し、その後は死んでいくという。26名の参加者は7月の自然学講座で同氏よりサケの生態を勉強しており、全員感慨深げにサケの行動を見つめていた。我々は子供が誕生した後、環境が変わろうともそれに対応した子育てをすることができる。一方サケは卵を産んで死ぬ。後はその環境に託する。自分が巣立った時の環境より悪化していないことを祈って、遙かベーリング海より4年ぶりに故郷の川に帰り最後の営みを行う。まさに感動ものだった。



与謝野町の位置



観察場所



蒲田充弘先生



産卵前シロサケのペア



産卵後の死亡魚

●地元地区の取組み

後野区公民館では区長さんらに地域でのサケの保護に関する取組みを説明していただいた。「子ども達を山に入らせようすると、イノシシなど危害を加える動物がいるのでよくないと言われ、川も危ないと思われている。自然豊かな地区にあって原体験できない状況になっている。しかし、サケが帰ってきた機会に、海洋高校の先生にお手伝いしてもらい川に降りて子ども達の生き物観察会をしている」との言葉が印象的だった。

●海を守るための取組み

蒲田先生は京都市で服飾デザインの仕事を経て、故郷の与謝野町（京都府）で環境保全活動に取組んでいる。きっかけは、子どもの頃に遊び場とたくさんの恵みをいただいた家の前の海が汚れ、子ども達に同じ体験をさせられないという危機感だった。阿蘇海は大部分が天橋立で仕切られているので海水の交換が悪く汚れやすい。この海をきれいにするにはどうすればよいか考えた。はじめは、汚れの原因は付近の工場だろうと思ったがそうではなかった。ひょっとすると自分たちの生活から出る廃食油も原因の一つかもしれないと考え、廃食油が捨てられないように有効活用を考えた。それがBDF（バイオディーゼル燃料）製造であった。各戸から回収をするのには大変苦労もしたが一定量集めることができるようになり、それが認められBDFを製造する装置も補助金で自宅の横に作ることができた。今では京都府北部地域で2万世帯（推定）から回収している。化石燃料の消費を抑えることから地球温暖化対策としても有効だと。製品は今まで公的機関のディーゼル車に使用したが、今は農業用トラクターや海外に輸出している。次に取組んだのは目の前

の海にできるカキ殻礁の撤去であった。カキ殻が大きくなればそれが障壁となり海水の交換を悪くする。それを地元と大学生の力を借りて除去するイベントを実施している。また、高負荷な農業排水が川に入る心配があったがサケの遡上が地域の自慢となり、その排水にも各農家が配慮する機運が高まった。

●彼の強い思い

ボランティアとしてなぜここまでやれるのですかと聞いてみた。「ふるさとに対する思い」との言葉が返ってきた。彼の口からは「地域」という言葉が頻繁に出てくる。地元の山海の食材たっぷりの「リフレかやの里」での懇親会には、区長さんらはもとより、蒲田氏の紹介で丹後ちりめん織元の安田さん、ミカン園の岸田さんが参加してくださり、地域の多くの宝物を紹介していただいた。彼は環境保全には地域の活性化が不可欠との信念があるようだ。

●その他のこと

丹後ちりめん歴史館、智恩寺、元伊勢籠神社を見学し歴史文化にも触れた。予期せぬことに7羽のコウノトリも迎えてくれた。副区長さんからは丹精込めて作られた新米をお土産にいただいた。我々は都市部では見られない自然に会いたくて地方に出かけている。そして行くところで素晴らしい自然に出会い、それを支えている人がいることにも気づく。今回の観察会もそうだった。地方にはそのような方々が実際に多いようにも感じる一方、自分は今住んでいる町に対しての「思い」はどうなのだろうと考えた。今回の観察会はそういう点からもいろいろ勉強になった。

以上